



『焼棚山』巡り (一)

塩田平民話研究所 所長 稲垣 勇一

つい最近「山姥ばなし」に係して、心に沁みるありがたい体験をした。

以前から日本民話の中の山姥については特別の興味を持っている。単純に山に住む鬼女と言いついてしまえない幅広い魅力を持つ山姥ばなしは、むしろ女として生きることの愁いや悲しみさえ内深くに含んで、奥が深い。それに気付いたのは、もうずいぶん前のことになるが、南信濃に残された「焼棚山（やけどなやま）の山姥」を知った時からだ。

外見は恐ろしい気な山姥だが、実はお人好しで里人の難儀に手を貸して何かと村人を助け、常日頃は住民からも「悪さをしねえ山姥だ」「山のおんばだ」と親

しまれるようになっていた。ところがある日、ワラビ採りに山に入つた二人の子どもが山から帰らない。村中総出で何日か探し、探しあぐねる途方に暮れた揚げ句の果てに、「山姥は人を喰う。山のおんばだつて山姥は山姥だから」という偏見と独断で、子どもをさらつたのはこの山姥と決めつける。そして陰険なだましでその山姥を焼き殺す。そういう話だ。

この話を知る以前から、もちろん「牛方山姥」「三枚のお札」「食わず女房」ちようふく山の山姥」その他いくつもの山姥ばなしは知っていた。そしてそれらが日本民話の女性妖怪を特徴づける複雑で多様な内容に彩られていることに、強く惹かれて

第 30 便
2025.8.1

塩田平民話研究所

〔事務局〕

長野県小県郡
青木村大字当郷
2072 番地 2

☎0268-49-1231
✉shiodadaira.minwaken@outlook.jp
http://www.shiodadaira.minwaken.net



もいた。焼棚山で山姥を焼き殺した火は、夜空を紅く染め川の水（み）の面に映り続けたという。話は信州伊那谷のこととして始まる。伊那谷といえは川は天竜川だし、その谷は下伊那の断崖絶壁のそれである。三年間下伊那で暮らした私には、この結末の情景を痛いほどはつきりと心に描くことができ、深く印象に残った。そしてそれまで読んできたいくつものばらばらな山姥ばなしが、私の中で一本の筋となつて一挙に形作られた。

その印象を「山姥哀愁」として色紙にスケッチし、座右の壁に掛けた。それと同時に、焼棚山が下伊那のどこにあるのか。最低、地図で押さえておく必要があった。ところが手持ちの幾冊かの地図帳のどこにもその山がな



稲垣勇一 画「山姥哀愁」

がつてくる▼六月中旬、能登演劇堂で仲代達矢さん主演の能登半島地震復興公演 無名塾『肝っ玉おっ母と子供たち』を観た▼肝っ玉おっ母は、幌車（えりか）を引いて戦地を渡り歩き、商売をして三人の子どもを育てる。戦場で遅く生き抜いてきたおっ母だったが、宝の子どもたちをすべて失ったときには、亡骸の傍らに座り込んで立ち上がれない。深い絶望と悲しみが会場全体を包む。仲代さんの力みのない言葉は、離れた座席にもはつきりと耳に心に届いた▼観終わっても、しばらく席を立つことができなかった。大切な命を奪い合う戦争に、静かな怒りが湧く▼観劇後、宿泊した和倉温泉は、20軒中5軒が営業を再開したのみ。大きな亀裂が入ったまま残り残されている老舗旅館。既に取り壊された瓦礫の山と化した旅館も。凸凹した歩道も残る。能登の復興は、まだまだ遠い。

（弘子）



幕が開いた。観客の歓声が劇場に響く。初夏の軟らかい日射しを浴び、肝っ玉おっ母を乗せた幌車が借景の丘からゆつくりと舞台へ上



アイヌ民話を追う

～アイヌについて考えた事～

思考

アイヌに興味を持ったきっかけは何ですかと聞かれても、色々な要素が重なって一つに絞るのが難しいのですが、アイヌの昔話やアイヌ語に興味を持った直接のきっかけは、稲垣所長に貸していた本、角川書店の『日本の民話 6 土着の信仰』の中に入っていた伝説を読んだことです。「言霊の力」のカテゴリに収録されていた北海道の伝説の中に出てきた「シロカニペ ランラン ピシカン コンカニペ ランラン ピシカン」という言葉の不思議な響きに惹かれたのです。調べてみると、登別出身のアイヌの女性、知里幸恵が編纂・翻訳したという「アイヌ神謡集」にたどり着きました。「シロカニペ ランラン ピシカ

ン コンカニペ ランラン ピシカン（銀の滴降る降るまわりに金の滴降る降るまわりに）」という言葉はこの本の最初に紹介されている鼻の神が自ら歌った謡の中の言葉です。翻訳を読んでも、お話の内容にも惹かれませんでした。動物である鼻が、神様として自分のことを語ること自体も興味深かったし、昔の貧乏人が今お金持ちになっただけで、昔のお金持ちが今の貧乏人になっただけといううです、という立場がひっくりかえる描写も好きでした。

このお話から、他のアイヌのお話にも興味が出てきて色々読んでみると、チャンスを探みたいなら、たとえ神様をおどかしてでもそれをやるべきという内容だったり、悪いことをした神様を懲らしめたりというようなものがあり、人間と神様の関係がとても面白いと感じました。また、実際にお話がどのように語られていたのだろうという興味から、インターネットで公開されている音声資料を聞いてみると、棒で拍子をとって節をつけて語るものだったり、節をつけずに淡々



銀のしずく記念館

と語るものだったり、色々な種類の語りがあることを知り、それにも興味を持ちました。

アイヌ語を学び始めてみると、植物（ヤブマメ）を探るときのおまじないや鳥のなきまねなど、声に出して言うのが楽しい簡単な言葉もありました。言ってみると、自然とともに生きていたアイヌの生活や気持ちに少し近づけたような嬉しい気持ちになりました。アイヌ語やアイヌの文化をもっと知りたいと思い、今年の3月にはアイヌに縁のある土地を中心に北海道を旅してきました。登別の知里幸恵 銀のしずく記念館では、アイヌがよく飲んでいたというエント茶をふるまってくださり、それを飲みながら知里幸恵さんのご家族の話や、当時の状況などを聞くことができました。明治以降、同化政策でアイヌ語の使用を禁止されて日本語を強制されたり、文化が侵害されたりする中、アイヌの文化を守ろうとした彼女の思いが伝わってきました。翌日の早朝に、知里幸恵さんと彼女の伯母である金成マツさんが眠っている富浦墓地に足をのぼしお墓参りをしていると、家族と思われる鹿の群れが、私の目の前で、木立のような墓石の中を静かに横切っていきました。忘れられない光景です。

萱野茂 二風谷アイヌ資料館でも、同じように文化を守ろうとした先人たちの思いがひしひしと感じられました。実はこの資料館は、冬期休館中だったので



二風谷アイヌ資料館

すが、どうしても見たいと言ったらご厚意で開けてくださいました。暖房がない中、時間をかけて館内を見ていると手がかじかんでしまいましたが、実際に使われていた古い民具を目の前にすると時間を忘れて見入ってしまいました。資料館を開けてくださった方に帰り際にお礼を言うのと、弱いものはなくなっていくつちゃうのかねえ。」と仰っていたのが心に残りました。アイヌ語は、消滅危機言語とされていて、実際に生活の中でアイヌ語を使っていた世代の方々は今も亡くなっています。そんな中でも二風谷では小学校で子どもたちにアイヌ語やアイヌ文化を伝える取り組みがされているそうです。白老町のウポポイでも、若者がアイヌの語りや歌、舞踊をするのを目にして、アイヌ文化を継承しようとする若い世代

ふるさとの民話探訪 26 西行の足跡

高僧伝説として名高いのは、弘法大師と西行法師。塩田平にも二人の伝説が幾つも残っている。果たして二人がこの地を実際に訪れたかは問われないこととして、今回は西行法師の足跡を追ってみる。

西行法師が塩田の地にやってきたのは、別所温泉に程近い山田峠。ここで、蕨採りをしている別所の子どもたちに出会う。「蕨を採って手を焼くな」と西行法師がからかうと、子どもたちは「檜笠被って頭焼くな」と応じ、麦のこを「冬茎立ちの夏枯草」と教える。子どもたちのあまりの賢さに驚いた西行法師は、山田峠を下り湯川に架かる橋のところで北向観音詣でを取り止め、別所には入らず踵を返す。そのため、橋の名が「西行の戻り橋」と呼ばれるようになった。

近年、温泉街に架かる橋の脇に「戻り橋」の看板が立っているのを見かけた。これは観光客目当ての偽物。



一方、中野には、西行塚石造多層塔が建つ。土中に埋まっていたものを1955年に復元修理した。西行法師が諸国行脚の道すがら、この地の美しい風景に心を打たれ、暫しここに庵を建て、住まわれたと伝わる。身に纏った衣で僧の値踏みをした金持ちの主を戒め、袈裟にご馳走をぶちまける「西行の袈裟供養」のお話は、この地を舞台にしている。袈裟供養は、弘法大師伝説ともされる。(弘)



がいて嬉しく思いました。私は言葉の響きが好きとか、考え方が面白いという入口でアイヌに興味を持って、たどれる範囲の近親者にアイヌがいるわけではないので、今アイヌが感じていることや、アイヌの文化をよく知らずに何かを発信することには慎重にならない、と思います。が、危機に瀕している言語・文化だと、なおさらそれを無くしたくない、大事にしたいという気持ちが高まります。困難な状況に置かれた歴史から、土地の言葉・文化を残していこうという運動があるのは、

沖縄とも共通すると思います。日本語とアイヌ語は系統的には違う言葉とされていますが、ラッコ、コンブなどアイヌ語から日本語に取り入れられた言葉もあれば、逆にクスリなど日本語からアイヌ語に取り入れられた言葉もあり、交流があったことが分かります。近くにありながら、まだまだ知らないことが多いアイヌ文化・沖縄を知ることが日



マンダリ(前掛け)

本や自分のことももつと知ることができると思っています。(紗衣)

(参考資料)

瀬川拓男・松谷みよ子(1926)

『日本の民話6 土着の信仰』角川書店

知里幸恵(2023)

『アイヌ神謡集』岩波文庫

知里幸恵(2023)

『銀のしずく記念館ガイド』知里森舎

中川裕(2020)

『アイヌの物語世界』平凡社

萱野茂(2020)

『アイヌの昔話 ひとつぶのサッチボロ』平凡社

中川裕・中本ムツ子

『カムイユカラを聞いて アイヌ語を学ぶ』白水社

産川

最近、新聞のコラムをじっくり読む機会があった。気になった内容を自分で調べ、私なりに物事の枝葉が広がっていく▼内容は

話題の時事とそれに付随したことの現在・過去・未来。例えば、三河の民話(柳田國男『野鳥雑記』から、古くは水恋鳥(水乞鳥)と呼ばれたアカショウビンの話を、その特徴的なさえずりや俊敏な動きから見つけにくい鳥であること、それから、今年のおかしな梅雨について書かれている。温暖化による異常気象の罪を人間が償う努力をしなければ、アカショウビン(水乞鳥)のように悲しくなき続ける



しかな、と締めくくられている▼これから私はどうするか。温暖化に対して個人でやれることは小さなことだが、行動に移し、考え続けることは簡単そうで難しい▼余談だが、アカショウビンをネットで検索すると、その赤褐色の姿にびっくりする。一度見てみたいが、森の中で暮らす野鳥。もし、そこそこお目にかかったら、それこそ異常事態だな、と思った。(道子)

民話とわたし III —「小泉小太郎」との出会い—

塩田平民話研究所友の会員 高橋 あや

幼い頃から親しんできた民話に、より深く惹かれるようになったのは、母親になつてからでした。数年を過ごした松本市で、住宅へ向かう道沿いに龍の背に乗った小太郎の像を見つけたとき胸が躍ったことを覚えていますが、子どもの頃から好きだった『龍の子太郎』（松谷みよ子・作）が、松本市中山に伝わる『小泉小太郎』と上田市塩田平に伝わる『小泉小太郎』を元にした物語だと知ったのは、また後のことです。特に上田の小泉小太郎については、伝えられている場所やエピソードをたどることができ興味をかき立てられます。大蛇が小太郎を産んだことに由来する「産川」の、上流「鞍淵」。その下流で今でも拾うことができるという「蛇骨石」。いつか訪れてみたいのです。私の住む佐久市にも多くの民話が残っています。いにしえから伝えられてきた土地の文化や伝統、人々の温かい思いを大切に、自分自身も楽しみながら語り継いでいけたらと思います。

第4回 民話語りっこ学びっこ

11月9日(日)

「民話語りっこ学びっこ」では、2023年から山岳信仰の問題に取り組んできた。それに関わる重要な要素として千曲川右岸、真田の民話を捉えて三年目、今年で最終の年となる。

今回は真田の神社や山を軸に真田の白山信仰を捉えたい。稲垣所長の講演では、真田の土地柄が加賀に発生した白山信仰とどう関わりがあるのか、それに関わる

課題が出される。山岳信仰、白山信仰に係った民話や、地元真田の民話を塩田平民話研究所員が語ることも予定している。また、民話塾スマイルキッズたんぼの土屋叶実さんが、白山信



秋の白山

事務局だより

◆本年度の総会を4月23日(水)に行いました。
◆本年も、以下の催しを計画・実施しています。

「昔ばなし語りの会」

上田創造館 6月29日(日)

2026年 8月24日(日)

2026年 1月25日(日)

とっこ館 3月22日(日)

「民話語りっこ学びっこ」

川西公民館 11月9日(日)

◆公立保育園四園での語りの回数が、本年度は年3回から2回になりました。

◆ホームページ開設から3年。アクセスが上がり、思わぬところから問い合わせをいただくことがあり、嬉しくなります。

仰が基底にある「石舟と白山姫」を語る予定なので、こちらも乞うご期待！

「民話語りっこ学びっこ」が開催される11月9日は真田の山々も美しい紅葉に覆われているか。真田の地が生んだ文化に思いを寄せながら学びの日としたい。

(和枝)

編集後記

人を思いやる心の喪失が加速している。「○○ファースト」はその最たるもの。○○でないものを切り捨てる論理だ。排外主義が台頭してきていることも見逃せない。差別が差別を生み、憎しみを増幅させる。広島・長崎への原爆投下を持ち出し、イラン攻撃を正当化するトランプ。「運よく能登地震があった」と不謹慎極まりない暴言を吐く与党議員。昔ばなしにも争いの場面はあるが、主題ではない。争いを争いにしない知恵を学び、発動したい▼米不足・米価高騰が深刻化して一年。備蓄米放出で息をついたかに見える。だが、根本は何も解決していない。政府は、減反政策の誤りに無反省のままだ。令和の百姓一揆が起きるのも無理はない。昔ばなしで農民を救うのは、九頭龍権現やお地藏様だが、今日の農家を救うのは、所得補償と価格保障だ



能登地震の被害を受け、取り壊し中の和倉温泉旅館

▼前便の「ふるさとの民話探訪24 金縄山実相院」のNo.に誤りがあった。正しくは「25」。お詫びし訂正する。

(弘)